



2025年 (令和7年)

10月号 (No. 965)

公益社団法人

日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価 1部 150 円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

創立120周年記念事業

グレート・ヒマラヤ・トラバース／ステージⅣへ中

ビアフォ・ヒスパー両氷河を踏破 カラコルムを満喫しフンザにゴール

吉井修

バルトロ氷河から下山後、重廣隊長はイスラマバードで入院中の松田隊員の帰国の道筋を立てるため、バルトロ氷河往復のみで帰国する中村、榛葉、阿部の3隊員とともにイスラマバードに戻ることにした。後半のビアフォ氷河からヒスパー氷河を横断してフンザに抜ける行程には吉井、飯田、轟、柳田、梅村の5隊員で向かうことになった。

この2つの氷河は、1892年にイギリス人W・M・コンウェイにより初めて踏査され、日本人で

は1955年に京都大学カラコルム・ヒンズークシユ学術登山隊の今西錦司や中尾佐助らによって初めて踏査された。氷河を登り、峠を越えて、その向こうの氷河を下る。しかも、その両氷河が世界で4番目と5番目の長さとなり、胸躍るものがあつた。GHTのフィナーレにふさわしいルートと思えたからである。

ビアフォ氷河を登る

7月17日…スカルドゥーアスコ
ーレ(3000m)

目次

ビアフォ・ヒスパー両氷河を踏破 カラコルムを満喫しフンザにゴール…1	
カナダ・ジャスパーでアルパータ峰 初登頂100周年を祝う……………4	
カタルーニャの若者カップル 日本の夏祭りや登山を楽しむ……6	
山の名著再読……………8	
大峯での円空の山籠修行を現地踏査…10	
東西南北……………13	
図書紹介……………13	
会務報告……………16	
ルーム日誌……………17	
会員異動……………17	
INFORMATION……………17	
新入会員……………19	
編集後記……………19	

▶日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間
月～金……………10～20時
第1、第3、第5土曜日……10～18時
第2、第4土曜日……………閉室

3日間スカルドゥーで休養した後、2台のジープで出発、再びアスコーレへ向かう。今回3度目の通過となる道だが、氷河から流れ出る川は泥色の凄じい激流、川沿いの道は相当の悪路で落ち着かない。

18日…アスコーレ→ナムラ

歩行開始の朝を迎えたが、昨夕から轟隊員の下痢が再発、食欲もなく、大事を取ってスカルドゥーに引き返すことになった(轟隊員はスカルドゥーに到着後、重廣隊長と行動をとるべくイスラマバードまで戻った)。残念だが、男性4隊員で6時30分に出発した。バルトロ氷河へ向かう橋の手前を左に折れ、ビアフォ氷河に入る。モレーンの砂礫の道は歩きにくく、日なたは軽く40℃を超えている。昼食後の登りで私もあわや熱中症か

という状態になり、歩行速度を緩めて、右岸にあるナムラのキャンプサイトに15時35分到着した。

19日…ナムラ→シャフオン

5時40分出発。サイドモレーンを1時間登るとなだらかな氷河上に出て、距離が稼げるようになった。氷の上に出ると涼しい風が吹き、暑さにやられる懸念が薄らいだ。ウズンブラック(6422m)を正面に見ながら、当初予定の右岸のモレーンの上部にあるマンゴールのキャンプサイトを見送り、前方左岸のシャフオンまで進んだ(13時55分到着)。モレーン上を長く登る方が体力を消耗するからだ。この先、ビアフォ氷河のキャンプサイトは全て左岸側になった。

20日…シャフオン→バインタ
(4050m)



25日…スノーレイク→ヒスパール(5170m)→カニバサ

6時に出発し、7時55分にヒスパール峠の上に立った。昨日は曇っていたが、今日は青空が戻った。日本山岳会旗を広げ、記念撮影をした。背後、スノーレイクの右にバインター・ブラックの尖峰がひときわ高く、天を衝くかのように見えるが、雲に巻かれて全容までは見えなかった。峠の向こうはクレバス帯、溝の狭い所を渡りながら下り、13時30分、カニバサまで下りた。

26日…カニバサ→ハグレシヤガリチン

27日…ハグレシヤガリチン→シ



ヒスパール峠で記念撮影

カムバリス

28日…シカムバリス→ビタンマル(3820m)

29日…ビタンマル→グルブリン(3100m)

30日…グルブリン→ヒスパール

(3100m)

31日…ヒスパール→カリマバード
ヒスパール氷河は、氷河の中央は荒れていて歩くことができない。

カニバサより下は終始、右岸の氷河岸を歩いた。ヒスパール氷河に合流してくる氷河を横断するのが急な登り下りを伴い、骨が折れた。26日にカニバサ氷河、27日にユトマル氷河、28日にプマリ・チツシユ氷河、29日にクンヤン氷河を横断した。氷河の周りは6000→7



ヒスパール氷河を下る。左奥がヒスパール峠

000m超えの山々が、圧縮されたかのように密集して峻立している。ヒマラヤ山脈の褶曲を、これまでのどの地帯より強く感じた。

下るに従い、氷河沿いの道は夏の花が咲き乱れて美しい。ビタンマルまで下りると放牧のため村人が上がつて来ており、もう打ち上げとばかりポーターが山羊を1頭購入し、夜、2時間かけて分配する一幕もあった。29日にはフンザ

方向が開け、シスパール(7611m)が遠望できた。ヒスパール村に入るとたくさんの子どもたちが後をついてきて、村人にもGHTのゴールを祝ってもらっている気分になった。31日、ジープでカリマバードに着き、松田隊員の帰国を見届けてフンザに入っていた重廣隊長と轟隊員の出迎えを受けた。

多くの経験を得た温故知新の旅

下山後は4日間、長谷川メモリアル・スクールやバルチット城、クンジェラブ峠、ドウイカルの展望地などを訪ねた。ディラン、ラカボシ、ウルタル、フンザ・ピーク、レディース・フィンガー、スパンティーク、シスパールなど、山々の景観を各所で楽しんだ。

GHTは「温故知新の旅」と言ってきたが、クンジェラブ峠へ向かう途中のパスール村で、重廣隊長と1977年のK2登頂時の、86歳になる高所ポーターとの再会があった。また、今回使った現地エージェントのボス、ナジール・サビールは同じK2隊のパキスタン側の隊員であり、大谷映芳や長谷川恒男らの隊をはじめ、多くの隊で活躍した経験豊かな登山家であった。貴重な話を伺うとともに、その部下のガイドたちは、噂に聞く重廣隊長に会えたことを喜んでいった。私たちは先人のお陰で親目的なメンバーにサポートされ、素晴らしいカラコルムの山旅を経験させてもらった。

コロナ禍で2年の中断があったが、2020年春から足掛け5年半で7回、ネパールの東端カンチエンジュンガ山群から続いた踏査の旅が完了した。GHTの旅は終了したが、多くの思いも寄らなかった景色(山の景観だけにとどまらず)を見せてもらい、各所で多くの知己を得て、また新たな世界が広がっていくのを感じている。これまで会員の方々から受けた多くの支援に、感謝いたします。

REPORT

カナダ・ジャスパーでアルバータ峰
初登頂100周年を祝う

吉川正幸

100年前の登頂日に開催

カナダのロッキーマウンテン脈のただ中にあるジャスパー市で、日本人によるアルバータ峰初登頂100周年を記念した式典と一連の行事が行なわれた。2025年7月21日、すなわち、1925年のアルバータ峰初登頂の日に合わせて行なわれた記念行事の主催者は、カナダ山岳会(ACC)とジャスパー・イーローヘッド・ミュージアム&アーカイブス(以下、J博物館)であった。

式典には、日本山岳会からは20名の訪問団と、翌日からアルバータ峰登山に挑むYOUTH CLUBの10名に加え、橋本しをり会長が参加した。さらに、在カルガリー総領事館の方々や現地在住の日本人の方も加わってくれたので、参加者は日本側だけで40名余りとなった。カナダ側の出席者も多く、記念行事は全部で100名近くの参加者で盛り上がった。

一連の記念行事は、前夜の歓迎パーティーに続き7月21日には、朝9時からのJ博物館における登山史家チック・スコット氏(ACC名誉会員)による登山史の講演から始まり、公園での記念式典と昼食パーティー、午後にはマイク・モーターティマー氏(元ACC会長、元UIAA会長)による、頂上に残されたピッケルに関する逸話の講演、そして、J博物館のアルバータ峰初登頂をイメージした巨大壁画のお披露目があった午後6時まで続いた。

晴れているとはいえ、とても夏とは思えない肌寒さのジャスパーの広い公園で行なわれた記念式典においては、ジャスパー市やカナダ山岳会からの挨拶、日本山岳会橋本会長の答礼などに加え、在カルガリー日本総領事の倭島岳彦氏、氏のご家族とは今日の式典につながる浅からぬ縁があったと、ユーモアを交えてお話しされた。また、訪問団に参加した3人の



ジャスパーの公園で開催された記念式典

宮城支部会員からは、100年前にアルバータ山頂に立った横有恒、早川種三の出身地である仙台市長からのメッセージが披露された。さらに、初登頂した三田幸夫元会長の子女である芳賀淳子会員が、おふたりのお孫さんとともに式典に参加されていることが紹介された。

芳賀会員は、『アルバータ山のピッケルものがたり』という子ども向けの絵本を上梓されており、当地のJ博物館に寄贈することを英語でスピーチされた。一連の行



左から筆者、芳賀淳子会員、チック・スコット氏

事の終わりには、J博物館のアルバータ峰の壁画の前で、参加した全員で「雪山讃歌」を歌い、英語版替え歌の「アルバータ峰」を歌ったことは、忘れたくない楽しい思い出になった。今回、大火からの復興支援のため企画された壁画制作に、私たちがわずかではあるが資金を寄贈できたことを嬉しく思う。

奇跡的に焼失を免れた博物館

アルバータ峰初登頂は、1923年9月の関東大震災の傷も癒えぬなかで、日本国民を元気づけた出来事だった。そして、アルバータ峰遠征の成功は、日本山岳会の礎となる出来事でもあった。長い



ジャスパー博物館のアルバータ峰初登頂をイメージした巨大壁画の前で記念写真に収まる参加者

間、行方不明となっていた25年にアルバータ山頂に残されたピッケルは、分かれて保管されていた2つの部分が発見され、97年の日本山岳会の年次晩餐会席上で元の姿に戻った。それから伝説のピッケルは、J博物館で大切に保管・展

示されている。

ところが、2024年7月に、周辺で起こった大規模な森林火災によって、ジャスパーの町は建物の3分の1が焼失するという大災害を被った。この報道を聞いたときには、ジャスパーでの初登頂100周年記念式典はできないと思ったものである。しかし、J博物館が奇跡的に焼失から免れたことを知って、カナダ山岳会と日本山岳会の有志で、ジャスパー復興支援のために、ぜひとも開催しようとアルバータ峰初登頂100周年記念行事の準備を開始した。

J博物館が山火事の被害を免れたことは奇跡ではあるが、そのほかにも、YOUTH CLUBのカナダキャンプを率いる松原尚之リーダーが、初登頂100周年に合わせてアルバータ峰に挑戦すると言ってくれたことも吉報であった。また、在カルガリー総領事である倭島氏から突然の連絡があり、父君が学習院大学山岳部のOBで、また、氏のご家族と芳賀孝郎・淳子ご夫妻とは縁があったので記念行事に参加したい、との連絡をいただいたことは、これまた奇跡のようであった。

若者たちの挑戦をリスペクト

ジャスパーで一連の記念行事を経験して、今更ながらジャスパー市とカナダ山岳会のアルバータ峰初登頂100周年記念行事への熱の入れようには驚かされた。私たちが忘れがちであったアルバータ峰の初登頂を、アルバータ州の歴史的な出来事として、今なお尊重しているジャスパー市民の誠意を感じた。また、カナダ山岳会関係者は、100年前に日本の若者が未踏の山に初挑戦を行なったこと自体を評価していた。それは、チック・スコット氏の講演の中で、現在もなお、アルバータ峰の垂直で1000mの北壁に挑戦する若者たちを採り上げて、記録に残そうという努力が続けられていることから理解された。

100年前の挑戦者だった6人の若者は、ジャスパーを39頭の馬の荷とともに出発した際には、初めてのカナディアン・ロッキーの山へのアクセスも登頂ルートも分からず、不安であったに違いない。不安を打ち砕き、氷雪の登攀の困難を乗り越えて山頂に立った事実

は、式典を通じて私たちにも再認識させ、静かに感動するところがあった。未知へ挑戦する心を忘れてはいけないという姿勢を、改めて認識したのだった。

挑戦という意味では、私たちのジャスパーでの記念式典に加わるための訪問団について触れなければならない。札幌から参加されたご高齢の芳賀淳子さんをはじめとして、旅行参加者20名のうち80歳を超える方が6名もいたのだが、2万歩にもなった2回のトレッキングに元気に参加されていた。後期高齢者の私も含めて、この旅行に参加することも、ささやかな挑戦でもあったが、全員元気に旅のハード・スケジュールをこなすことができた。

最後に、今回アルバータ峰に挑戦したJACCカナダキャンプ隊が、私たちが帰国した後、登頂に成功したとの報に接した。気象条件が悪かったとはいえ、今でも氷雪の岩壁を登るのが難しかったと聞いて、100年前の挑戦が、いかにすばらしいものであったかと再認識したのだった。

(アルバータ峰登頂100周年記念プロジェクト・リーダー／写真：荒川一郎会員)

TRAVELOGUE

カタルーニャの若者カップル
日本の夏祭りや登山を楽しむ

エヴァ・ジョウ／マルク・ダルマツ

本部の国際委員会では、且ころから海外よりの問合せに対応している。過去の日本人のヒマラヤ遠征についてのものや、日本でハイキングをしたいというもので多岐にわたる。

最近では、カタルーニャ（スペインの自治州）の若いカップルが8月に1ヶ月間、日本で登山旅行をしたいと連絡があり、特に登山関連の情報提供の手伝いをして、彼らがかなり充実した旅をしていたので、その足取りを寄稿してもらった。

〈和田〉

旅に出る前に、人はまず何をしたいか、どんな旅にしたいか、を自問するものでしょう。スペインのカタルーニャ山岳会（Centre Excursionista de Catalunya）の会員である私たちの場合は、文化と自然を融合させた旅にしようと決めました。初めての日本旅行で、外国人にとってハイキング・ルート

の情報を見つけるのは難しかったため、私たちは日本山岳会の英語ホームページより国際委員会に助言を求めました。そして、今回の文章を書くご縁につながりました。私たちの旅行記を皆さんに楽しんでいただければ幸いです。

日本の充実した鉄道システムのおかげで、私たちはほぼ毎日移動して日本のあちこちを訪ねました。当初、行きたい所をリストアップしてみたものの、とても全てを訪ねるのは不可能だったので、私たちは今回の旅を本州に限定し、北海道の観光や四国のお遍路巡りなどは今回の訪問に残すことにしました。

まずは東北で夏祭りを堪能

まず東北では、夏祭りを堪能しました。秋田の竿燈まつり、盛岡のさんさ踊り、青森のねぶた祭り、そして仙台の七夕まつりです。その後、日光を経て西に向かいまし

た。伊勢神宮を訪れ、新宮では唐揚げやお好み焼きなど素晴らしい食事を堪能しました。日本の食べ物には本当にどこも美味しくて、湯葉や天ぷら、ラーメンなどたくさん食べました。胃の限界があつたのが残念です。

熊野那智大社も参拝しました。尾道からはしまなみ海道をサイクリングして上島諸島や北木島を訪ねましたが、静かで大好きになりました。移動の合間には東京、京都、大阪にも数日間滞在しました。それまでほかの外国人はあまり見かけなかったもので、これらの大都市との観光客の集中度の差を感じました。

私たちは、東北の山で日本の深遠な側面も探求することができました。恐山を訪れた後に、宿の人から「幽霊は見たか？」と冗談交じりに聞かれたこともありました。また、出羽三山にも興味をそられました。羽黒山は旅のハイ



秋田の竿燈まつりを見物した筆者のふたり

ライトの一つで、そびえ立つ杉の巨木に圧倒されました。湯殿山では即身仏を拝観しましたが、予想以上に霊的で、身が引き締まる体験となりました。

最後の1週間は登山のはずが：

旅の最後の1週間は登山に費やしました。まず、中山道の一部を歩き、竹林や鬱蒼とした森、見慣れない昆虫、そして、人影のない静かな道を楽しみました。さらに、南アルプスの北岳と間ノ岳の稜線を歩くことが、今回の登山のハイライトとなるはずでした。薫さんがルート選びや山小屋の予約、交通の手配を手伝ってくれましたが、計画は必ずしも思いどおりには進

みません。

登山前夜、私たちは改めて天気予報を確認しました。夜通しの大雨と、昼ごろは嵐の予報でした(訳注: 肩の小屋は、林道が閉鎖されない限り3日前からキャンセル料がかかるため、ふたりは登山口に向かいました)。

私たちは、天候が悪化する前に肩の小屋に到着できるよう、急いで行動する覚悟を決めたのです。そのために万全を期して、前の晩は芦安駐車場の近くに宿もとりました。

午前5時、おにぎりをリュックに詰めてバス乗り場に行くと、なんと、運転手から林道の閉鎖を知らされました。夜間の豪雨が大規



旅のハイライト、羽黒山の参道に行く

模な土砂崩れを引き起こしたのです。私たちのつたない日本語での会話は、イエス・ノーの推測ゲームのようになってしまいました。天候や自然は、決して私たちの思いどおりにはなりません。最も楽しみにしていた登頂を諦めるのは残念でしたが、私たちはその日を、家族や友人に絵葉書を書く時間にあてました。

旅は私たちに多くのことを教えてくれます。海外で登山をする場合、情報や連絡手段が思うようにいかず、不測の事態への対応がより大変になります。また、慣れない環境要因にも遭遇します。私たちの例で言えば、熊です。私たちが住むピレネー山脈にも熊はいま



中山道では熊ベルが設置されていた

すが、数が少なく、めったに目撃されることはないのです。これまで真剣に遭遇を考えたことはありませんでした。日本では、インターネットで調べてみると、特に熊鈴について相反する意見

があることや、ヒグマとツキノワグマについても異なる情報があることを知りました。考えた結果、熊鈴を2つ携行し、熊スプレーは持たないという判断をしました。今でも正解は分かりませんが。中山道では熊の気配を感じ、少し怖い思いもしました。

交通手段も課題でした。一部のバス会社は独自のウェブサイトをもち、登山のオフ&ピーク・シーズンなどによって時刻表が変わりますが、一般的なナビゲーション・アプリには反映されないことがあります。機械翻訳などのお陰で、対面での会話はなんとかできましたが、一部の山小屋や宿坊は電話での予約が必須で、私たちには難しく、なんらかの

対応が不可欠だと痛感しました。

最後に、日本が私たちを歓迎し、その文化や食、そして自然の豊かさを分かち合ってくれたことに感謝しています。さらに、今回の旅を通じて私たちをサポートしてくれた日本山岳会と国際委員会にも、心から感謝を申し上げます。

オーバー・ツーリズムが世界的な社会問題になっているなか、日本の大都市でも観光客の多さを感じましたが、私たちの故郷バルセロナでも同様のことが起きています。ですから、私たちは、皆さんをカタルーニャのピレネー山脈に心から招待したいと思います。自然に触れる観光を体験でき、どんな都市よりも感動的な風景をお約束します。

連載■文庫本でも楽しめる

山の名著再読

(51)『霧の山稜』(加藤泰三著・朋文堂)

中村好至恵

これは一冊の優れた山の画文集である。大胆に太い筆致で描かれた、正確なのに、しかしどここいうこともなく遊びというか、温かみのある作風。それは、思えば著者・加藤泰三その人なのだと感じる。しっかりとしたデッサンに裏付けられた豊かな表現だが、実はこれは彫刻科(東京芸術大学)出身ならではの骨太な捉え方でもあるだろう。概して彫刻家の絵は、どの作家も味わい深くすばらしい。

昔、この本を手にしたときは、ただただ「いい絵だなあ」とまず構図の大胆さ、そして魅力的な筆使いに惹き付けられ頁をめくった記憶



昭和16(1941)年初版発行

があるが、改めて本全体を味わうと、あくまでも自分のペースや好むところを崩さず山や自然と向き合い、それでいて人付き合いもよろしく、温和に伸び伸びと生活や山を愉しむ様子がどこからも溢れている。なんとという自由さ! 昭和初期というあの時代において、何一つ背伸びすることなく、初心者であるスキーで転倒しつつ仲間と熱中する様など、若さゆえの生命力を感じる。

が、同時にあまりに繊細とも言える感受性で物事を見詰める彼には、若者特有とは言い切れぬ、芸術家の持つ特別な感性を感じざるを得ない。たとえば、冒頭の一節『あまりに美しい景色を見たときは、どんな気がする?』『……死にたくなる』『あの答えをしたのは誰であったか、／あんな会話を交わしたのは、／何時であったか。／／此処を真直行けば、谷へ

堕ちる。』(「雪原」より)などを読めば、ハッと息を飲む思いがする。その文章にはどこか達観したような、此処ではない、彼方を見詰めているような透明感があり、絵に添えられた文章は、それぞれが卓越した一遍の詩を思わせる。筆者はこの本を読んでみると、時代も背景も何もかもが異なり比ぶべくもないふたりなのだが、どうしても辻まことのことを思い出してしまふ。辻の、触れると手を切る

ような感性に加え、シニカルなものの見方や冷徹明晰な頭脳から繰り出される言葉の的確さに、時としてたじろいでしまふが、彼の繰り広げる豊かな創造の世界はあまりに広大で深淵だ。そして加藤の文章を読んでいると、人との交流も温かく、家族思いでもある好青年がそこいながら、山の中での独りの彼は、何か遠くのものを見詰めて、そのまま独り彼方へ歩んで行ってしまうような「漂泊感」を感じるの、筆者だけだろうか? 「霧」という一遍などは、ぼかしを使った儚くも淡い墨色にて霧中の木立を絶妙な構図で配置しているが、語られているものを読むと、その冷たい霧の木立の中で、読み手

自身もがゾッと凍るような感覚に引きずり込まれる。短文だがなんという凄みだろう……。

最後にもう一つ「虹」という詩を。「山上の湖水に虹がかかった。／：／／誰も否定できない／この虹の美しさ。／誰も否定できない／この虹の果無き。／／この虹を再び見る為に、／砂粒のようなこの僕に、／出来る事はたった一つ／来世また生まれてくること。」

この本は朋文堂の声掛けにより1939(昭和14)年、最終的には著者自身の思い入れも深く纏められた一冊の画文集であるが、絵とともに文章も深く味わって、かつてこのように山と向き合った青年がいたことに思いを馳せたい。そこにはなんのテライも名譽心もなく、ただ山に、自然に、友に、そして芸術に心を傾けた青年がいる。本来ならこれほどの才があれば、あとどれほどの作品や著作を今もつて私たちは楽しめたのだろうか。加藤はこの珠玉の一冊を残し44(昭和19)年6月25日、ニューギニア・ビアク島で戦死、33歳だった。加藤の「来世」はどこに融解し、結実しているのだろうか……。

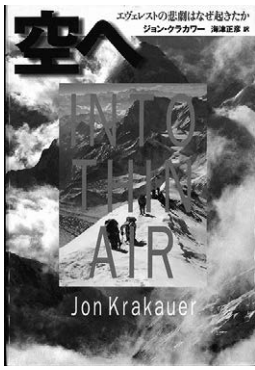
(図書委員会委員)

『空へ』(J・クラカワー著・文藝春秋)

神長幹雄

世界最高峰エベレストであるがゆえに、世界の登山史に刻まれた出来事はいくつもある。1975年の田部井淳子による女性初登頂も、歴史的な登頂としてニュースが世界を駆け巡ったが、96年5月10日の大量遭難も歴史に残る大事故となった。初期の公募登山隊に象徴的な事象がいくつも重なり、突然の嵐によって6人のクライマーが亡くなってしまったのだ。顧客の1人として参加した難波康子は、田部井の初登頂から21年、日本人女性第2登を達成した直後の遭難でもあった。

本書(海津正彦訳)は、副題に「エヴェレストの悲劇はなぜ起きたか」とあるように、翌年の3月から、時間の経過とともに高度(場所)を少しずつ上げながら登頂、そ



平成9(1997)年初版発行

して遭難に至るまでの原因を詳細に検証したノンフィクションである。この年は著名な登山家やガイド、高所シエルパたちがネパール側だけでも5隊、BCに集結していた。難波たちが参加したロブ・ホルルの率いる「アドベンチャー・コンサルタンツ隊」、スコット・フイッシャー隊長の「マウンテン・マッドネス隊」、映画撮影のための「IMAX隊」、台湾の「高銘和」隊などだ。しかも5月10日の1日にその4隊がアタック、それぞれの隊に高所シエルパが付くのだから、まさに「過密状態」だったと言えるだろう。

著者のジョン・クラカワーは、シアトル生まれのアウトドア・ライターでありクライマー。アメリカのアウトドア雑誌『アウトサイダー』誌から依頼されて公募登山隊の顧客の1人として参加、その実態をレポートする企画だった。そして運命の5月10日、天候が急変して嵐になり、頂上に達した顧客5人のうち隊長のロブ・ホルルや難波康子を含む4人が亡くなってしまう。事故の当事者となったクラカワーは、その後、生存者を訪ねて証言やインタビューを繰り返して、徹底した取材を重ねて、450ページにおよぶ山岳ノンフィクションを著わした。

本書の中で、クラカワーの難波に対するやや厳しい指摘が続く。「とりわけ難波康子は、力不足のようだった。(略)足元が怪しく、数回もアルミ梯子を踏み外してクレバスへ転落しそうになったし(略)クランポンの使い方もろくに知らないようだった。」

これはアイスフォールでの記述だが、登頂間近の「バルコニー」上部の「渋滞」箇所でも、「難波康子のあせりと技術不足が、危うく悲劇を起こしそうになった。」と記されている。

私は、その難波に雑誌の取材で冬の富士山に同行してもらったことがある。吹雪の中の登頂となったが、足取りはしつかりしていて、なんの不安も感じなかった。もちろん富士山とエベレストでは比べるべくもないが、難波はこれまで一流クライマーにガイド役を頼み、海外の高峰に挑んできた。定職を持ったOしだから、ガイド依

存度はどうしても高くなるだろう。

本書は、エベレストの公募登山隊の実状を明らかにした点で、多くの示唆に富む。高所シエルパの実力が向上する一方で高所気象の精度の欠如、情報通信機器の格段の進歩など、システム化されつつある公募登山隊の現状を露呈した象徴的な遭難だった。なかでもガイドと顧客の関係に大きな一石を投じることになった。顧客に付き添い、彼とともに遭難したガイドのロブ・ホルル、ニュージールランド在住の妻との最期の衛星電話による会話、そして、フィッシャー隊のガイドが顧客を置いて無酸素で登頂し、だがその後、献身的な救助活動をしたことなどなど。

つまるところ、ガイドと顧客の関係はどうあるべきか、公募登山隊は今後どうなるのか……、重い課題がいくつも突き付けられたことになる。最近のあまりに完璧にシステム化された公募登山隊の「今」を暗示するような大量遭難だったのだ。

文庫版は「文春文庫」(2000年発行)と「ヤマケイ文庫」(2013年発行、税込み1430円)がある。
(図書委員会委員)

HISTORY EXPLORATION

大峯での円空の山籠修行を現地踏査

東海支部 清水克宏

円空、大峯に向かう

生涯12万體とも言われる造像活動で知られる江戸前期の僧円空（寛永9（1632）年—元禄8（1695）年）は、幼くして母を亡くして出家したものの、寺を出奔し、伊吹山の行場（修行の場）のシンボルとも言える平等岩周辺で、噴火直後の有珠山に初登できるレベルの山岳修行をしていたことが彼の和歌や文献、像の背中の銘文（背銘）などから分かります。

円空は造像活動を始めて数年後に、当時は「蝦夷」と言われ地理的に未解明だった北海道に渡り、有珠山と内浦岳（北海道駒ヶ岳）に初登し、10体の像の背銘に山岳名を記していることは、本会報943号（2023年12月）でご紹介したとおりです。これは当時、内浦岳、有珠山と連続して有史以来の噴火を起こし、次にどの山が噴火してもおかしくない状況であったことから、山を鎮めるためであったと考えられます。しかし、円空が蝦夷

を後にした直後の寛文7（1667）年9月、「たろまゑ乃たけ 圓」と背銘に記した樽前山が突如、大噴火を起こしています。円空は、自分の山岳修行の未熟さを思い知らされたのではないのでしょうか。

蝦夷から帰還後、円空は寛文11（1671）年ごろに、出生地と推定され、たび重なる大規模な水害で多くの死者を出した地に、長良川の源と考えられていた白山の本地仏・十一面観音を中尊とする中観音堂（岐阜県羽島市）の諸像を造顕し、悲願を果たします。そして、翌12年から延宝3（1675）年ごろにかけて、山岳修験における最大の霊地、大峯山で厳冬期も含めた本格的な山籠修行に入ります。当時の大峯がどのような地で、円空がどのような修行を行なったのかを現地に追いかけてみました。

当時の大峯はどのような場所だったのか

「大峯」という言葉は、地理的、宗教的、歴史的に様々な使われ方を



画像1 金峯山寺蔵『金峯山山上山下并小篠等絵図』山上・小篠部分
画像提供：奈良女子大学術情報センター（附属図書館）

しており、広義では大峰山脈全体が「大峯」ということになります。国土地理院の地形図に「大峰山」という山はなく、その頂で役行者が蔵王権現を感じたとされる山上ヶ岳（1719m）に山上蔵王堂（現・大峯山寺本堂）があつて信仰の中心となっており、その周辺に

「西の覗き」に代表される表行場や、「平等岩」に代表される裏行場と呼ばれる修行の場が開かれ、円空は山上を中心に修行したと考えられます。円空が蝦夷の小幌の岩屋で造像した観音菩薩坐像の背銘に「江州伊吹山平等岩僧内」と記している、伊吹山のシンボル平等岩も、



画像2 厳冬期2月の筈の窟。湧水は凍結している

大峯の同名の岩にあやかつたものでしょう。

山上ヶ岳は冬季豪雪に覆われるため、円空当時は山上蔵王堂の戸開が4月8日、戸閉が9月9日と定められ、この間が山上での活動期間とされていました。円空は多くの天台宗系の寺僧、真言宗系の満堂とともに、毎日務められる三時供養法、護摩供、初後長講、法華懺法などに加わり、修行を行なうなかで、法華経や大般若経など、經典に関する理解を深めていったのでしょう。円空は大峯山寺本堂に阿弥陀如来坐像を残しています。また、江戸中期の「金峯山山上山

下并小篠等之絵図」(金峯山寺蔵、画像1)を見ると、当時は小篠まで山上と一体の信仰の場と見ていたことがうかがわれます。小篠は、山上ヶ岳から南東に歩いて約1時間、山上では稀少な水が豊富に得られる場所で、「小篠の宿」とも呼ばれ、神仏が宿るとされた大峯奥駈道沿いの「宿」(拝所・行所)の中でも最も重要なものでした。円空は小篠の歌も残しています。

大峯山中のもう一つの重要な行所として、大普賢岳(1780m)東の大岩壁に穿たれた、標高約1450m地点に位置する大峯山中最大の岩窟・筈の窟があります。筈の窟は、山上や小篠と違い、冬籠りができる地理的条件に位置することから、別名「南室門」と呼ばれ、季節を問わず籠居する修行が行なわれた場所です。そして「千日籠」と言われる苛酷な修行が、天慶4(941)年の道兼(のち日藏)の修行以来行なわれていた記録に残り、大峯修験最盛期の鎌倉時代には、「筈窟冬籠」が年中行事に組み込まれていました。円空は筈の窟や、その近くにある鷲の窟を和歌に詠んでいますから、ここで修行をしたことも間違いありません。

また、円空は大峯山西麓の天川郷(現在の天川村)にも像を残し、和歌を詠んでいます。天川郷は山上ヶ岳周辺を源頭とする天ノ川流域の村々で、その河畔に鎮座する天川弁財天社は、修験の二大勢力であった天台宗系の本山派総本山・聖護院門跡と、真言宗系の当山派の総本山・三寶院門跡が峰入りする拠点ともなっていました。同社に円空の大黒天像が、天川郷14ヶ村の一つ栃尾の観音堂に観音菩薩像、大弁財天像、金剛童子像、そして最も早い時期の護法神像が伝わります。さらに天川村各所に個人蔵の小像が10体ほど伝わり、天川郷と深く関わっていたことがしのべられます。

円空の大峯修行はどのようなものだったか

円空の足掛け4年に及ぶ大峯修行について、これまで「千和屋振る 筈(の)窟に ミそきして 深山の神も よろこひにけり」という歌があることから、筈の窟で冬越しの修行をしたと考える研究者もいました。しかし、円空が大峯周辺の冬越しを詠んだ歌は次の2首です。

(1) 大峯や 天ノヲ川に 年をへて 又くる春に 花を見(る)らん
(2) 昨日今日 小篠(の)山ニ 降(る)雪ハ 年の終(り)の 神の形(かげ)かも

(1)の歌は、天川郷で年を越した折のものと考えるべきでしょうし、(2)の歌は、小篠の宿で冬越しをしたと読めそうです。そこで、筈の窟と小篠の宿が冬季どのような状態にあるのか踏査しました。

断崖に張り付くようにある筈の窟は、窟内に湧水があるので、厳冬期に訪れてみると完全に凍結しており、ここで修行をするには水や燃料などの確保が必要ながうかがわれました(画像2)。大峯東麓、北山川側の上北山村の天ヶ瀬集落(現在は廃村)出身の岩本逸男氏著の『ふるさと天ヶ瀬』によると、筈の窟での籠修行は、許可された特別な者だけがでるもので、支援基地となる天ヶ瀬から食料や燃料など様々な支援を受けて成り立つものだったとのこと。そのため、厳しい山岳修行の衰退した江戸時代には、筈窟冬籠は、年中行事としては行なわれておらず、たとえば、安政5(1858)年ごろに、武蔵国の木食行者が千日山

籠を行なった満願の碑が天ヶ瀬に残されているように、特別な修行として行なわれたようです。天ヶ瀬に円空の像は伝わらず、円空の笙の窟の歌に禊が詠まれていることから、その修行は、冬ではなかったと考えられます。

一方、旧暦の「年の終」に当たる2月の厳冬期に、小篠の宿の小屋に泊まり込み調査したところ、気温はマイナス16度、往年ならさらに寒く、1mを超す積雪があった

ことでしよう。ただし、小篠の沢は湧水のため、冬でも凍結することではなく、水を得ることは可能でした。小篠は標高約1630mと、標高が笙の窟より200mほど高いだけでなく、季節風の関係で積雪も格段に多く、里から遠いため支援も得にくい条件にありました。小篠での越冬修行は、円空が自らに課した、例外的で苛酷な修行だったのではないのでしょうか。

円空が大峯山上での修行に入っ



画像3 松尾寺蔵 役行者像および背銘(前田邦臣氏撮影)

たのは寛文12(1672)年夏以降で、冬場はいったん山麓の天川郷栃尾村にあった堂の谷の窟で越冬修行をしたと考えられ、かつてはここに置かれていたという諸像が現在、栃尾観音堂に伝わり、そのうち観音菩薩の像内に納められた「寛文

(年は欠損)」と書かれた紙片が確認されています。

そして、翌13年(9月より延宝元年)、戸開から戸閉まで山上蔵王堂周辺で修行をした後、引き続き小篠の宿で越冬修行を行なったと考えられます。このような苛酷な山籠修行を経ていったん山を下り、志摩国に入り、片田の三蔵寺と立神の薬師堂で600巻に及ぶ大般若経を、それぞれ転読しやすいように巻子から折本に補修し、見返しに大胆に省略された添絵を描いています。この添絵を繰り返し描くなかで、円空は造像における大胆な省略法を学んでいったと推測されます。

3回目の修行をもって満行に

そして、翌3年、再び山上で戸開から戸閉までの3回目の修行をもって満行とし、この折に造られたと思われる、背銘に「法隆寺文殊院秀恵」「延寶三卯九月於大峯圓空造之」「山寺法印」之宿」と記された役行者像が、法隆寺の別院とも言われた大和郡山市の松尾寺に伝わります(画像3)。

同像は、円空が9月9日の戸閉に当たり満行の証に彫り上げ、法

隆寺文殊院の僧秀恵を介して、二之宿(先達寺の長老が大宿で、次席の二宿が諸事を掌った)に修行を勤め上げた報告と謝意を伝えるために納めたものと考えられますが、その嗜れやかな笑顔が印象的な像です。

以上のように、円空の大峯修行を追いかけていくと、修験集団の中で教義や祈祷法を身に着ける修行も行なったのでしょうか、堂の谷や小篠での越冬修行など、独り自己と向き合う、禅僧のそれに近い修行にも重きを置いていたことが浮かび上がります。その修行を経て、自らの命を仏法を護る護法に捧げる決意をしたことが、各所での大般若経補修の営みや、この時期以降多く造られる護法神などからうかがわれます。

【参考文献】

宮家 準著『修験道組織の研究』(1999年、春秋社)
首藤善樹著『金峯山寺史』(2004年、国書刊行会)
天川村史編集委員会編『天川村史』(1981年、天川村役場)

【注意】画像の無断転載を禁止します。

東西南北

「ウェストンの地図」、その後

堀源太郎

W・ウェストン師(以下、師と略す)の使っていた地図の入手に関しては、2022年8月の機関誌『山岳』と、会報「山」2023年5月号(936号)に記したとおりである。この地図は、師の2回目の日本訪問(1902～05年)の後、ロンドンで王立地理学協会の機関誌『ジオグラフィカル・ジャーナル』に「TRAVEL AND EXPLORATION IN THE SOUTHERN JAPANESE ALPS」として書き、翌年の06年1月5日に、加工して使用していた地図の元本を王立地理学協会に寄贈したものと思われる。

私は師の研究者ではないが、その地図を概観して感じるものが2点ある。地図には、多くの登山者がさうするように、自分の歩いた

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

場所を地図上に線を引いて記録していることだ。師の研究者にとっては、多くの情報を提供してくれるものと確信している。研究者ではない私が感銘を受けたのは、師の強靱な体力と好奇心である。

一例を挙げれば、1904(明治37)年、富士吉田口より富士山頂に登って往復した際、山頂の「お鉢巡り」をしたとき、火口に降りていると思われることである。火口に降りることは、現在では許可を取った場合を除き禁止されているが、往時は自由に降りることができたのだろう。いずれにしても、師の好奇心の強さには驚かされる。

もう一つ驚かされるのは、地図の縁に刻まれた「皴」だ。登山家にとって地図は命である。師が日本国内山行中に使っていた地図が偶然発見された経緯は既述のとおりであるが、地図に刻まれた皴と劣化の跡は、師がこの地図の範囲を

行動中肌身離さず身に着け、持ち歩いていた証左でもある。この地図は1枚の地図ではなく、自身の行動範囲に合わせて切り貼りしたものだ。最下部には、1887(明治20)年発行の「FUJI」、真ん中に同年発行の「KOFU」、そして、変則的だが最上部左端に1888(明治21)年発行の「UEDA」の、諏訪湖を中心とした7×8・5cmの部分の切った加えたものである。

ことは別として、師の初来日は1888年のことだから、偶然とはいえ、英語版の地図は師の来日を待っていたかのように発行されたのであった。英語版の地図がいかに有用であったかは、疑う余地がない。本図の複写は今回、師と縁のある南アルプス市の「南アルプス市芦安山岳館」の地に保存し、多くの方々に見てもらうとともに、師の日本における足跡の研究に寄与するため、識者のお口添えもあり寄贈したものである。

図書紹介

角幡唯介著

地図なき山 日高山脈49日

漂泊行



2024年11月
新潮社刊
四六判変形 288頁
2100円+税

本書は北海道・日高山脈を舞台にした異色の登山記録と、その思索をまとめた一冊である。著者の計画は「静内からシユンベツ川を遡り、日高山脈主脈をめざす」という一文だけ。最大の特徴は「地図を持たない」ことだった。今やGPSや地図アプリが常識の時代に地図なしで沢を遡行することは、未来

を予測できないカオスに自らを放り込む行為にほかならない。

角幡はその動機を「よりよく生きるためだった」と語る。地図は世界を秩序づけるシステムであり、それを捨てることは不確実性を背負って自由を求めることだ、と言う。遭難者が必死に「生還」を目指すのに対し、漂泊には目的がない山という迷宮に身を任せ、主体的に判断し行動する。その過程こそが冒険であり、自由だと著者は考える。

記録は2017年から22年まで、足掛け6年、4回に分けての山行が基になっている。第一章では静内の河原を歩き出し、見た山や岩に自分で勝手な名前を付け、ノートに書きとめて世界を分節化していく。未知の沢を遡るなかで滝や雪渓に阻まれ、テンカラ釣りで食料を得、ヒグマへの備えを模索する。標高が上がれば気温が急落し、凍える夜を越える。不確実性の連続が、読む者にひりひりとした緊張を伝えてくれる。

やがて「現在地が分からない」状態に陥る。世界から切断された亡霊のように漂いながら、それでも山と一体化していく瞬間が訪れる。

著者は「私と山が同化し、判断のなかに山それ自体が体現していた」と振り返る。この象徴的体験は、地図を持たない漂泊登山の核心を示す。

回を重ねるごとに行動感覚は変化した。当初は「大それた行為」と思えた地図なし登山も、やがて未来が白紙のまま歩くことに慣れ、風景に翻弄されつつも受け入れる境地へと至る。最後の登山では「次の予定が景色」に決められていくことを自然に感じるようになったという。

著者は冒険ノンフィクションの世界ではよく知られる存在だ。チベットのツアンポー峡谷を単独探検した『空白の五マイル』や『極夜行』の印象が強いが、本書は初めての「国内」での冒険記録である点でも特筆される。大学探検部出身で、泥臭い沢登りやアルパインの経験を積んできたからこそ、この実験的登山を形にできたのだろう。読み進めるうち、日高山脈の特異な姿も立ち現れる。幌尻岳やカムイエクウチカウシ山など急峻な山が並ぶ中部日高は、登山者憧れの山域である。登山道のない沢を地図なしで抜ける試みは、著者ほどの

創立120周年記念 山岳祭冊子と記念切手販売のご案内

「引き継がれる山岳祭」PJ

①創立120周年記念冊子

「引き継がれる山岳祭」の販売

本会が関わる14の山岳祭すべてが分かる冊子です。オールカラー／A5版／約150ページです。

頒価11000円（税込み）

発送の場合は送料実費請求いたします。

発売日12025年12月6日

（出）年次晩餐会で直売いたします。

②創立120周年記念 オリジナル切手の販売

顕彰人物の11人が110円と85円の切手になります。

頒価11全11シートのセットを5000円で販売します。発送の場合は送料実費請求いたします。

発売日12025年12月1日
（出）年次晩餐会で直売いたします。



顕彰人物は次の11人です。ウオルター・ウェストン、小島烏水、岡野金

次郎、高頭仁兵衛、木暮理太郎、田部重治、榎有恒、藤木九三、深田久弥、播隆上人、泰澄大師
問合せ1「引き継がれる山岳祭」PJ坂井広志 ☎090・1405・3285

imatsuya@blue.ocn.ne.jp

ご注文の際は、①と②の数および届け先をメールまたは電話でお知らせください。

*収益金は「引き継がれる山岳祭」PJに入ります。

経験者でも苛酷で、心が折れてもおかしくない。だが、その不可能性こそが読者を惹き付ける。

一方で本書は、単なる登山記録にとどまらない。今の時代は先の見えない不確実さに包まれている。

そのなかで「目的地を持たず漂泊する」という姿勢は、現代人にとっての生き方のヒントを含む。太陽がない、コンパスがない、食料がない——著者が繰り返し描いてきた「何かが欠けた状況」を通じて、

人は逆説的に自由や創造性を得るのではない。本書はその思想を鮮やかに体現した作品である。

読み手はつい国土地理院の地図を開いてルートを追い掛けてしまうが、それすらも著者の意図した「地図の呪縛」を実感する体験かもしれない。角幡唯介の「国内漂泊」の記録は、日高を知らない読者にとっても、予測不能な時代をどう

電子版会報「山」の

登録のお願い

会報のカラー版を電子版でお送りしています。發送費削減のためにご協力をお願いいたします。電子版を登録しても通知（メール）や電子版が来なかった方は迷惑メールなどを確認のうえ、再度登録をお願いいたします。

不明な点は、デジタルメディア委員会 (internet@jac.or.jp) にお問合せください。

【電子版への登録】↓

<https://jac1.or.jp/kaiin/>
2025040135272.html



生き抜くかを考えさせる一冊だ。

(市川純造)

八甲田山 新たな真実

伊藤薫著



2025年2月
山と溪谷社
四六判 408頁
2200+税

明治35(1902)年1月、日本の山岳遭難史に刻まれた悲劇が八甲田で発生した。大日本帝国陸軍第八師団青森歩兵第五聯隊が、1泊2日の雪中行軍で遭難した事件だ。同じ師団に属する弘前歩兵第三十一聯隊が同時期に行なう八甲田越えの雪中行軍に対抗するため、その行軍はわずか1日前に命令が下達されるといふ慌ただしいものであった。急ごしらえの部隊は、記録的寒波と装備の不備が重なり八甲田北麓の目的地に到着できず、数日間彷徨の末、部隊の将兵210名のうち199名が凍死する結末を迎える。この悲劇の真実とはなんなのか。本書はその謎を解明していく。

著者の伊藤薫氏は元自衛官で、

すでに、この雪中行軍に関する書籍を2冊、山と溪谷社から刊行している。本書は、既刊『八甲田山消された真実』以降に新たに発見された、捜索隊・佐藤秀雄中尉が父親に宛てた手紙「佐藤書簡」や五聯隊生還者の倉石大尉が日露戦争の戦地で行なった凍傷予防講話(手記)などによる傍証を加え、定説とされた内容にも鋭く切り込んでいく。

本書の特筆すべき点は、第四章で描かれる2つの部隊の対比だ。遭難した五聯隊と、八甲田越えを成功させた第三十一聯隊の行軍を時系列で追い、その行動が克明に描かれている。両隊の行動が対比され、同じ気象条件の中での行軍でありながら、それぞれが全く別の思惑で行軍を行なっていることも明らかになっている。五聯隊が遭難を回避できたはずの「節目」が複数存在したことや、第三十一聯隊が巧みに利用した嚮導(道案内)と響応(宿泊地の宿や民家での接待)に関することも、前著よりも詳細に示されている。

本書を紹介する上で、新田次郎の小説『八甲田山死の彷徨』(東宝映画『八甲田山』の原作)を抜きに

は語れないだろう。私は新田の著作を読み、山に興味を持ったひとりだが、同書は繰り返し読んだ。その卓越したリアリティに満ちた描写と物語に、私はすっかり魅了された。

だからこそ、新田の小説は史実に忠実に書かれたと受け止めてきた。このことを伊藤氏は、「小説がノンフィクションを凌駕し史実になっってしまった」と表現している。本書を読み進めるうち、小説の描写の基になった軍部の資料そのものが、事実隠蔽のため意図的に捏造されていたものと気づかされる。何が真実なのか、著者とともに探るのが本書の魅力の一つである。

本書の紹介に当たり、『八甲田山死の彷徨』(令和7年4月20日・102刷)を再読した。改めて、新田の卓越した脚色力に感嘆した。今もなお悲劇の新事実を世に問う伊藤氏と、それを待つ読者がいるのは、多くの人命が失われた事件の重みに加え、この作品の存在があるからと言えるだろう。

123年前の冬、旭川で最低気温マイナス41℃を記録する記録的寒波の中、雪中行軍遭難は起きた。

背景には、日露戦争前夜で軍事力強化を無理に進めていた日本の姿があった。だが、遭難で得られたはずの教訓は、戦地で食料保存や凍傷対策に十分に活かされること

はなかったようだ。一度決断すると中止を許さない軍指導者の精神論も、昭和20年の敗戦まで顧みられることはなかった。

(内田光太郎)



令和7年度第6回(9月度)理事会

議事録

日時 令和7年9月11日(木) 19時

00分～21時00分

場所 集会所およびオンライン

(zoom)

【出席者】橋本会長、永田・柏各副

会長、原田・猿渡・荒川各

常務理事、望月・池田・吉

田・大塚・梅田・片山・武

川各理事、石川監事、(オン

ライン参加)飯田副会長、額

賀監事

【欠席者】根本

【オブザーバー】原会報編集員、長

島事務局長(書記)

【審議事項】

1・遺贈寄附の受入れに伴うNPO法人との提携について(猿渡)

不動産に関する遺贈についてNPO法人相続・不動産サポートセ

ンターと業務提携する提案を審議

した。契約内容等に不確定な部分

があるため、見送ることになった。

(賛成0、反対14)

2・監査法人との財務に関しての

指導・助言業務契約の継続につい

て(猿渡)

引き続き監査法人と契約を継続

することを承認した。(賛成14、反

対0)

3・特定資産のヒマラヤキャンプ

基金の取崩しについて(猿渡)

当初計画どおり200万円を一般会計に移すことを承認した。今回が基金の取り崩し最終年度になる。(賛成14、反対0)

4・事務局の電話受け態勢(原田)

本部事務作業の集中のため事務局の電話受け時間を10時から16

時とし、時間外は自動音声再生と

することにした。(賛成14、反対0)

5・創立120周年記念式典・年

次(祝賀)晩餐会に関するJTBへ

の外注について(原田)

昨年に引き続き、晩餐会参加費

用の集金業務をJTBに外注する

ことを承認(賛成14、反対0)

6・創立120周年記念式典・年

次(祝賀)晩餐会の来賓について

(原田)

記念式典に招待する来賓につい

て検討した。柏副会長を中心に最

終案を決定することが承認された。

(賛成14、反対0)

7・支部関連の行事への理事派遣

について(柏)

支部からの要請に基づく支部行

事への理事派遣費用について整理

した。予算との関係を整理した上

で、基準を作ることにした。支部

には手続きに従い派遣申請を徹底

することをお願いすることに。

(賛成14、反対0)

8・名誉会員推薦について(原田)

名誉会員1名の推薦に関して審

議した結果、見送ることになった。

(賛成0、反対14)

【協議事項】

1・2025～27年の主たる目標について(原田)

理事会として今後2年間に取

組むべき事項について検討した。

2・9月17日の支部連絡会議の議

題(原田)

支部連絡会議の内容について協

議した。

【報告事項】

1・入会承認報告(橋本)

正会員24名、準会員3名の入会

承認の報告があった。

2・寄附金および助成金受入報告

(猿渡)

寄附金5件の138万630円

の受入報告があった。

3・スマホ会員証について(永田)

開発中のスマホアプリの会員証

機能(現在の会員証に加えてスマ

ホで会員証が提示される)につい

て紹介があった。

4・新入会員オリエンテーションの開催(永田)

総務委員会により9月6日、新入会員オリエンテーションが開催され、滞りなく終了した。参加者52名(うちリモート25名)。

5・山の日議連の法案作成のサポートについて(原田)

山岳4団体の会議があり、「登山道環境整備の推進に関する立法」について協議を進めていくことを確認した旨の報告があった。

6・CAC創立80周年記念会への出席(橋本)

CAC 80周年記念式典(韓国)に参加する報告があった。

7・評議員の選任について(橋本)
橋本会長から評議員として、黒

川恵、桐生恒治、安井康夫、清登

緑郎、坂井広志、藤田礼子、小野

純江、松田宏也、古野淳、平川陽

一郎、久保田賢次、川瀬恵一、長

島泰博、東条真百合(敬称略)の各

会員に委嘱するとの報告があった。
8・創立120周年記念式典のタイムスケジュール(支部懇談会含む)(永田)

れたとの報告があった。式典の前に会場を用意して本部と支部役員等で話し合う場(支部懇談会)を開催する報告もあった。

9・グーグルカレンダーの支部との共有(永田)

グーグルドライブの理事会の予定を記入したカレンダーを支部役員と共有するとの報告があった。これにより本部―支部間で年間の予定等の共有ができるようになる。

【その他】

会報「山」9月号発行について

事務局連絡

ルーム目誌 9月

1日 資料映像委員会 記念事業委員会(山岳古道調査)

2日 広報委員会 スケッチクラブ

3日 山行クラブ

4日 常務理事会 支部事業委員会 YOUTH CLUB

5日 記念事業委員会(国際交流PJ) 入会説明会

6日 新入会員オリエンテーション 記念事業委員会(コーカサスの桜PJ)

8日 アルパインスキークラブ 山遊会

9日 フォトクラブ

10日 財務委員会 かつばの会

上高地クラブ

11日 理事会 自然保護委員会

紫蘭会

12日 東京支部 図書委員会

16日 総務委員会 麗山会 沢登り同好会Ⅱ

17日 支部連絡会 東京支部 三水会 緑爽会

18日 科学委員会 医療委員会

みちのり山の会

19日 クニ塾

20日 アルピニズムクラブ

22日 総務委員会

24日 子どもと登山委員会 YOUTH CLUB委員会

25日 記念事業委員会(グレート・ヒマラヤ・トラバース)

26日 学生部 緑爽会

29日 秩父宮記念山岳賞審査委員会

30日 東京支部(茶話会) 記念事業委員会(引き継がれる山岳祭)

9月来室者 367名

会員異動

物故

渡辺純一(15465) 25・9・2

野副 勇(16990) 25・8・28

退会

宮澤茂男(11232) 信濃

中村洋子(15096) 東海

村上富美江(17375) 岩手

INFORMATION

インフォメーション

ATIN

◆2025年フォーラム「登山を楽しくする科学Ⅹ」 科学委員会
日時 11月22日(土) 13～17時(12

会場

時30分から受付開始)
立正大学品川キャンパス
「ロータスホール」品川区大

崎4・2・16 (JR大崎駅

北改札西口から徒歩5分

*ホールへは「山手通り口」
から入場)

演題と講師

1・「山の名前を考える」修験道との係わりについて」松本敏夫氏 (日本山岳修験学会会員/日本山岳会会員)

2・「世界水準の『エコ登山』とは?」さらに低山藪山にも登山者増!」大蔵喜福氏(一社・南信州山岳文化伝統の会理事/日本山岳会会員)

3・「赤色立体地図」1枚で立体的に見える地形表現の利活用」千葉達朗氏 (赤色立体地図発明者アジア航測株式会社フェロー)

申込み 11月10日までに氏名(ふりがな 会員は番号)、住所、電話番号を記載し木曾雅昭 kagaku@jac.or.jpへ。

定員 先着150名

資料代 500円(学生無料)

問合せ 木曾 ☎090・253

6・7170

◆「雪崩から身を守るために」講演会 雪崩事故防止研究会

「雪崩から身を守るために」の講

演会を、札幌および大山講演会に続き、次の3地域で開催します。

●第8回栃木講演会

日時 11月29日(土) 10～18時

会場 大田原市ピアートホール

(定員721名)

共催 宇都宮大学農学部応用生命

化学科生物有機化学研究室、南東北雪崩研究会ほか

講演 「雪と雪崩の科学」など5テーマ、講師5名

●第7回東京講演会

日時 11月30日(日) 10～18時

会場 青山学院大学(会場未定)

共催 青山学院大学山岳部・雪崩事故防止研究会

講演 「降雪と気象」、「防災科研の山岳地帯における気象観測と情報提供」など7テーマ、講師7名

●第6回白馬講演会

日時 12月13日(土) 14～21時

会場 協和ウイング白馬

共催 白馬村、小谷村、一般社団法人白馬村観光局ほか

講演 「雪と雪崩の科学」、「防災科研の白馬での気象観測と情報提供」など7テーマ、講師7名

問合せ 雪崩事故防止研究会代

令和7年度後期

「海外登山助成対象登山計画」募集

海外登山助成委員会

公益社団法人日本山岳会では登山界の活性化を目指し、優れた海外登山計画に対して「海外登山基金」による助成を行なっています。

困難を求めている挑戦、オリジナルな発想、斬新な切り口、独自のテーマのある計画など、ユニークな登山計画を支援したいと考えています。会員資格やパーティ編成などの条件については問いません。ぜひご応募ください。

●申込み締切

2025年12月31日(木)

●審査

2026年1月中旬に審査後、2月の理事会で助成の可否を決定します。

●報告と記録掲載

助成対象となった登山隊は下山後、報告書を提出してください。また、会報「山」や機関誌『山岳』への記事執筆や、報告会へのご参加にもご協力ください。

●問合せ・申込み先

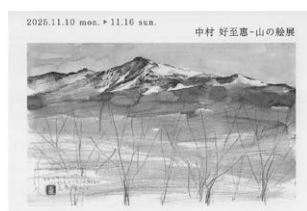
日本山岳会事務局

☎03・3261・4433

平日(10時～16時)、土(第1・3・5の10時～16時)

✉ jac-room@jac.or.jp

件名「海外登山助成申請書請求/海外登山助成申請」



と。 <https://www.yamano.com>

山や自然の中で描いた水彩画や小品を50点ほど展示。会場では来年度の「山の絵」カレンダーや一筆箋・絵葉書なども販売。

*詳細は「山の絵」HPをご覧ください

画廊問合せ 045・261・321

会場 041 横浜市中区吉田町5・1

時間 11月10日(月)～16日(日) 11～18時(最終日は17時まで)

◆中村好至恵「山の絵展」

表・阿部幹雄 ☎090・3118・1929
mabe@seagreen.ocn.ne.jp
【事務局】〒064・0921 札幌市中央区南21条西8丁目1・37 (株)石田商店
内 ✉ask@assh1991.net

◆編集後記◆

●「日本で海から一番遠い地点」をご存じですか？ 多分皆さん北海道内と思われるでしょうが、実は本州の中央、「長野県佐久市田口榊山国有林12・う林小班」という地点です。JR小海線田口の東方、雨川砂防ダムの上流から、沢歩きに慣れた人なら1時間半ほどで到達できます。ただし、なんの変哲もない稜線直下の斜面です。

●国土地理院が調べたその地点は、太平洋と日本海の海岸線から概ね115km離れているそうです。9月下旬、千葉支部の皆さんと探訪してきましたが、証拠写真を提示すると、佐久市観光協会臼田支部から立派な「認定証」がもらえます。私の認定番号は4785でしたが、我々を含め物好きな山やは結構いるものですね。

(節田重節)

日本山岳会報 山 965号

2025年(令和7年)10月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 橋本しをり
編集人 節田重節
E-メール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社